令和３年度小松市立松東みどり学園　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導	**いじめ・不登校の未然防止と早期発見** ・いじめに対する積極的認知を行うために、職員会議で生徒指導主事が中心となって情報共有、共通理解を図る。 ・不登校傾向の児童生徒や欠席が２日連続で続く児童生徒へは、担任による定期的な家庭訪問を実施する。また、前期と後期には個人面談やいじめアンケートを実施する。	・職員会議ごとに児童生徒理解の時間を確保し、共通理解を図っている。また、職員間での日常的な報告連絡相談で、前期課程と後期課程の間でスムーズで密な情報交換を行っている。 ・教職員に対していじめに関する研修会を実施し、事例検討を通して組織的な対応力を高めた。 ・不登校傾向の児童生徒には、時間外の登校や別室登校など柔軟な対応を実施しており、登校が難しい場合は保護者との連絡を密に行った。 ・２日連続で欠席が続く子どもはわずかであったが、人間関係で悩みを抱える子どもが複数おり、懇談や話し合いを行って丁寧に対応した。	・いじめの積極的認知について、教職員間での共通理解を図るため、情報交換を積極的に行い危機意識を高めていくように努めた。児童生徒に対しては、いじめアンケートや悩みアンケートを実施して、結果をもとに即座に個人面談を実施し、継続的に見守ることができた。 ・欠席の多い児童生徒に対しては、担任が密に連絡を取り合い、登校のヴァリエーションを提示するなどして学校との関係が途切れないように努めた。副担任や養護教諭、関係機関とも連携して対応することができた。今後も継続してケアできるように情報交換や連絡を取り合っていく。
特別支援教育	**児童生徒理解を深め、特別支援教育の充実を図る** ・児童生徒理解の会において、気になる子について共通理解するとともに支援について協議し、組織的な対応を行う。 ・校内委員会を定期的に(必要に応じて随時)開催し、要支援児童生徒に対する効果的かつ早期の対応を検討する。また、関係諸機関との連携を密にし、より有効な支援のあり方を追究する。 ・校内研修等で、特別支援教育・発達障害等についての職員の理解を深める。	・毎月の児童生徒理解の会で情報共有を行い、組織的対応に努めた。 ・全学年の児童生徒について校内委員会を開催し、要支援児童生徒の実態と特性について共通理解するとともに、支援について協議した。　・特に支援を要する児童生徒については専門相談員の派遣を要請し、支援についての助言をいただいた。それをもとに、保護者に対して通級指導や発達検査を勧めた。 ・発音に困難さがある児童を通級指導教室につなげることができた。	・定期的な児童生徒理解の会や校内委員会のほか、要支援児童生徒について適宜支援会議を開催した。その際、専門相談員や臨床心理士、スクールカウンセラー等の参加を要請し、児童生徒の特性の理解を深めるとともに、支援策を具体化することができた。また、保護者にも参加してもらい、支援の方向性を共有することができた。今後は定期的に支援策について検証しながら、必要に応じて支援会議を開催していきたい。 ・級外職員、支援員、心の相談員等の臨機応変な対応により、児童生徒へのきめ細かな支援を行うことができた。
道徳教育	**小中連携し、道徳教育の向上を図る** ・小中連携して道徳の研究会を開催し、学びを深めるための発問について教材研究会を行う。 ・道徳教育推進教師が研究授業を行い、講師を招聘し、小中合同の研修会を行う。	・藤岡主任指導主事を校内道徳研修会の講師に迎え、小中連携して道徳教育の指導力向上を図った。提案授業を通して、効果的な発問や板書の工夫、タイムマネジメントなどについて学び合うことができた。 ・推進教師が授業構想を可視化できるワークシートを用いて、学びの姿を明確にし、考えさせたいことを焦点化させねらいにせまるためのポイントを職員に広めた。 ・道徳に関する保護者アンケートを実施し、意見を参考に別葉の重点項目に「感謝」を追加した。	・家庭と連携した道徳教育の推進を目指すために、全学年における授業公開や保護者対象のアンケートを実施した。アンケート結果より、「感謝」を重点項目に追加し、学校行事などに位置付けて意識を高めた。 ・夏季休業中に校内研修会で取り上げた授業構想シートを活用し、授業実践を進めた学年が複数あった。 ・単級のため、個々での教材研究・授業実践となっているため、教材研究に関する相談の機会や職員間の参観の場を設けるなど、授業力向上につながる校内の仕組みづくりを進めていく。
キャリア教育	**キャリアパスポートの活用によりキャリア教育を推進する** ・「めあて→活動→ふりかえり→次に生かす」の流れを定着させ、それぞれの学年の実態に応じて「キャリアパスポート」を活用しながら、自己の成長を見つめ、実感させていく。 ・各学期のめあてはフィッシュボーンを使って立てさせ、定期的に振り返り、足りないところを意識させたり、声をかけたりする。 ・体験的活動や啓発的活動を地域人材や卒業生を招聘し効果的に活用する。 ・年度末にキャリアパスポートファイルを家庭に持ち帰り、児童生徒の成長を保護者と共有する。	・各学年で行事や児童生徒会の振り返りを行い、自分の成長を見つめる機会を設けた。また、子どもの成長や気づきを学級通信を通じて児童生徒の成長を保護者にも伝えた。 ・２ヶ月に一度，「フィッシュボーン」ツールを使って「なりたい姿」の自己評価を行い，できるようになったことを実感したり，足りないところを意識して行動したりすることができた。学年によっては目標を忘れている児童生徒がいたため，自分のめあてがいつでも見えるように工夫している学年もあった。 ・夏休みの全校登校の日に８，９年生対象に卒業生をお招きして，当時の学校生活の様子や先輩として後輩に伝えたいことなどを話していただき，夢や目標をもって将来の見通しをもつことができるようにした。	・今年度は全学年統一した様式でのキャリアパスポートづくりに取り組むことで、めあてに向かう大切さやPDCAサイクルによる自己の成長の実感を深めることができた。家庭との連携による効果も見られ、教職員の関わりも含めた学校全体での取り組みは有効であった。 ・学校行事だけでなく、外部人材を活用したそれぞれの学年行事・学習も、自分自身の普段の行動や将来について考えるよい機会となった。
保健健康教育	**自分の健康や体を自分で守ろうとする意識を育む** ・生活体育委員会や保健給食委員会など児童生徒が主体的に考えた企画を通して、児童生徒の運動機会を増やしたり健康的な生活を送ることができるようにする。 ・K‘ｓ体操クラブやダイナミックの方など専門の先生をお招きして，職員の健康や運動への理解を深め、運動の楽しさに触れる授業が充実するようにする。	・生活体育委員会では運動量を増やそうと「全校遊び」を企画したが，県独自の緊急事態宣言が出ていたため中止となった。その代わりとして「全校ハンカチチェック」を行い，忘れ物が多かった学年はもう１週追加するなど衛生面の徹底を行った。 ・保健給食委員会は学校保健委員会に向けて「コロナ禍でも元気に過ごすために」というテーマで事前に児童生徒にアンケートをとり集計した。それをもとに発表内容を考えていく予定である。また，子どもから「万歩計をつけて運動量を増やしたい」という声が上がっているので，その企画についても考えていく予定である。 ・１学期は１～７年生を対象に水泳教室を実施した。地域の元日本記録保持者の方にそれぞれの学年に応じた指導をしていただき，児童生徒は水泳の楽しさを感じ，教員もその後の指導に生かすことができた。	・自分の健康・体を自分自身が守ろうとする意識をはぐくむために、児童生徒主体の活動や外部人材の活用の推進により、計画通り進めることができた。特に、学校保健委員会では、「自分の頑張りを認めていきたい」「自分を大事にして過ごしていきたい」といった変容が児童生徒にみられ、有意義な機会とすることができた。 ・意識の高まりは個人差が見られること、自分自身の心身の状態を知り、よりよい毎日を過ごす力をつけるためには成長段階に応じた適切な学習機会が必要であることから、今後も計画的に深めた内容での取り組みを継続したい。
特色づくり	**９年間の学びの中での、特色ある教育活動を推進する** 【みらい探究科】 ・みらい探究科の課題解決のために地域の施設や人材を活用する。 【英語教育】 ・global timeで１・２年生から外国語に触れる時間を設け、英語に対する興味・関心を高める。	【みらい探究科】 ・地域の自然環境保全団体の協力を得たり、市の施設を利用したり、パラリンピック競技の体験を福祉と関連させたりするなど、地域内外の人材を生かした取り組みができ、課題解決に結びつけた。 【英語教育】 ・グローバルタイムで英語に触れる機会が増え、日常生活でも英語を使う姿や、英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする姿が多く見られるようになった。また、積極的にALTの英語を聞いたり、自ら話したりすることで、英語の音声に親しみ、より自然な音程での発話につながっている。	【みらい探究科】 ・すべての学年で、地域の施設や人材を活用して学習を行うことができたが、実態に合わない計画もあった。実態にあった学習計画になるよう見直す。 ・台湾の彰化市との交流や文化祭での学習発表では、英語で会話・発表した学年もあった。コミュニケーションタイムの学習も生かし、英語で発表する機会がもてるよう計画する。 【英語教育】 ・グローバルタイムで触れた英語の表現を,家に帰ってから家族に伝えたり,休み時間もALTと一緒に英語を使ったゲームに取り組んだりするなど,意欲的に英語に親しもうとする姿が見られた。単語や表現に加え,やり取りを通してコミュニケーションを深められるよう学習内容を検討したい。

学校関係者評価	・子どもが喜んで学校に行っていることがいつの時代でも一番大事である。アンケート結果でも「学校生活が充実している」の肯定的な意見が９０％以上であったが、今後も子どもが楽しい、保護者が通わせたいと思える学校をつくっていって欲しい。 ・時間外勤務の多さが課題となっている。多くの資料作成など無駄な業務をなくし、先生方の時間を子どもたちに向けるように改善できると良い。 ・「自分で計画を立てて勉強している」という項目に課題がある（特に後期課程が低い。）子どもに対して過干渉にならず、子どもに判断させていく場面をより多く作るように改善し、主体性を高めてほしい。 ・義務教育学校は特別な学校であることを市内にアピールし、他から入りたいなと思わせるような独自の取り組みを実践していってほしい。 ・統合前から挨拶の良さが学校の自慢であったが、継続されている様子がうかがえる。 ・義務教育学校の成果はあせることなく長いスパンで考えていくと良い。途中で変更するなど柔軟に考えてより良い形を模索していってほしい。 ・来年度からの学校運営協議会は、学校だけが背負う形でなく、学校と地域、保護者が共に学校運営に関わっていく形が良い。そのためにそれぞれがどんな役割を果たすのかこれから整理する必要がある。